

《論文》

グローバル・シティズンシップを育む学習活動の成果と課題 — 小学校におけるESDカリキュラムの実践事例 —

藤原孝章・池田花笑子

要 旨

本研究は、外国につながる子どもが多数を占める小学校で、日本も含めた多様な文化的背景を持つ子どもたちが、地球的課題を共有し、共に生きるための授業づくりを企図し、そのために学校のカリキュラム改善を実施し、マネジメントしたものである。グローバル・シティズンシップを育む学習活動の多くは、正規的教育課程内に位置づいていない。そのため、継続的な取り組みは難しく、単発の実践になることが多い。継続的・系統的な取り組みを維持させるためには、教育課程への位置づけは不可欠である。

本研究は、その目的を達成するために、グローバル・シティズンシップの育成につながる視点から、社会科や国語科、外国語科などの教科、総合的な学習の時間、学校行事等と関連づけ、学校カリキュラムを改善し、授業実践を行い、かつ、学習者の学びの変化を調査したものである。本研究の構成は、研究の目的と計画、グローバル・シティズンシップを育む学習活動として4つの国際理解、2つの地域理解の授業実践、および、意識調査の結果と分析からなる。

Research on Lessons Aimed Fostering Global Citizenship in Education for Sustainable Development in an Elementary School

Summary

This research suggests curriculum improvement for making lesson plans to share global issues, live together and fostering global citizenship in an elementary school where many children have roots connecting to foreign countries and diverse cultural backgrounds.

Many of the learning activities for fostering global citizenship are not part of the formal national curriculum. So it is difficult to take a continuous implementation in school. For maintaining continuous and systematic efforts it is indispensable to position fostering global citizenship in the school curriculum.

In order to achieve this purpose, this research improves the school curriculum, practices lessons, and investigates changes in learners' learning. Such curriculum is able to make from the viewpoint of fostering global citizenship in related to subjects such as social studies, Japanese language, foreign language, the period for integrated studies and school events and so on.

The content of this research consists of the purpose and plan of this study, four lessons practices for international understanding and two lesson practices on learning communities aimed fostering global citizenship, and the results and analysis of awareness surveys.

I はじめに

平成29年(2017)度告示の現行学習指導要領の前文において、これからの学校の役割として、「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにする」ということが求められ、このた

めに必要な教育の在り方を具体化することが各学校における教育課程であると示されている。そして、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性」という三つの資質・能力の育成を教育課程の目標とし、学校教育全体や各教科等が目指す共通目標が示された。また、その教育課程は社会との連携及び協働によりその実現を図っていく「社会に開かれた教育課程」であることが重要になるとあるように、今日的な課題をふまえた教育活動が今後、学校現場において必要とされている。

例えば、SDGs に代表されるように、世界各地での異常気象による災害の頻発、貧困問題、紛争、テロリズム等、今、世界が抱えている課題を協働的に解決していこうとする動きが、加速している。それぞれの国や地域の暮らしは、その中だけで完結しているわけではなく、世界全体とつながっているという認識が当たり前のものとなる中で、自分たちの生活だけを守ることは、もはや不可能であるということに自覚し、地球的な課題を協働的に解決していこうとするグローバルな視野をもった行動が今後ますます求められる。

日本においても、外国人労働者の増加や国際結婚が進み、学校現場は外国につながる子どもの多国籍化が進み、複数の異なる文化的背景をもつ子どもたちが同じ教室で学んでいることが珍しくなくなっている。そうした状況にともなって、日本語指導が必要な外国籍・日本国籍の児童生徒も増え「特別の教育課程」としての日本語の学習も課題になっている。現段階においては、全体からみれば少数かもしれないが、今後ますます社会のグローバル化が進む中で、そうした状況の学校現場は増え、様々な文化的背景をもつ人々と一緒に暮らしたり、一緒に働いたりすることが当たり前の社会へと変容していくものと考えられる。

また、一般的に、小学校のカリキュラムは、社会科や国語科などの教科、総合的な学習などの時間、および学校行事や学級活動、クラブ活動などの特別活動から編成される。しかしながら、学校や地域の特色や児童の現状に合わせて、教科等横断的な内容を中心に総合的な学習の時間を軸としたカリキュラムを作成し、柔軟に対応することが必要になってくる。本研究で示す授業実践は、外国につながる子どもが多数を占める学校で、日本も含めた多様な文化的背景をもつ子どもたちが、地球的課題を共有し、共に生きるための授業を企図し、そのために学校のカリキュラム改善を実施、マネジメントしたものである。表3「ESD 学習の関連図」に示すように、総合的な学習の時間と教科書で扱われている教材や指導事項を有機的に組み合わせ、策定した学習活動計画のもとに取り組んだ授業実践の経過を分析する。

Ⅱ 研究の目的

2030年に向けて、私たちの社会が解決しなければならないことは山積している。地球的規模の課題をいかに自分の生活につなげて考えることができるか、あるいは、多様性に対する認識をどれだけ深めることができるのかという点について、私たちは多くを学ぶ必要がある。とりわけ、これからの社会の中心となっていく子どもたちに対する教育については、もっと議論されるべきであると考えられる。

平成31(2019)年に採択された新たな国際的枠組みである「持続可能な開発のための教育：SDGs 達成に向けて(ESD for 2030)」において、「ESD が質の高い教育に関する SDGs に必要不

可欠で要素であり、その他の全てのSDGsの成功への鍵として、ESDはSDGsの達成の不可欠な実施手段である。」¹⁾と決議され、国際社会において、ESDの重要性が確認された。また、日本においても、令和2(2020)年度から実施されている学習指導要領の前文と総則に、ESDの理念が見られる。そうした中、令和3年(2021)5月に改訂された『持続可能な開発のための教育(ESD)推進の手引』において、「ESDは、地球規模の課題を自分事として捉え、その解決に向けて自ら行動を起こす力を身に付けるための教育」²⁾であるとし、国内外に山積する今日的な課題に対して、教育が大きな役割を担うものとの認識が示された。

しかしながら、上述したような今日的な課題をふまえた教育活動は、それほど広がりを見せていない。北村(2015)が、「多文化を受容する共生社会の礎となるのが、グローバル・シティズンシップという概念である。人権や平和といったグローバルな価値観を育むためには、異なる国・地域の政治、社会文化、宗教などに対して寛容であることが求められる。そのようなグローバル・シティズンシップ教育を実践していくうえでは、カリキュラムの改革や教授法の改善が欠かせない。」³⁾と指摘するように、グローバル・シティズンシップといった概念を教育現場に浸透させるための準備が必要である。しかしながら、その準備が十分に整っているとは言えないのが現状である。

国内において、グローバル・シティズンシップのようなグローバルな価値観を中心においた教育活動は、国際理解教育や開発教育、ESD等が担ってきたものと考えるが、これらの「教育課程内への位置づけに拘束力のない」学習活動は単発で終わることが多い。教科書もなく、共通の学習目標もない中で、文字通りゼロから学習活動を組み立てなければならない教育分野である。指導者にある程度の知識や技量がなければ、質の高い教育内容は提供できない教育分野であるともいえる。学習活動を継続的で質の高いものにしていくためには、だれもが指導できる体制を整えなければ、これまでと変わらず単発の教育活動に終わってしまうであろう。つまり、学習目標が明快で、学習内容、指導法等を確立させると同時に、教育課程に位置づけることができるかどうかにかかっているとと言える。

本研究においては、小学校において、多文化共生や地球温暖化といった今日的な課題をふまえた学習活動をより質の高いものにしていくための教育課程を見直す視点について考察する。異なる文化や様々な国や地域のくらしの様子、世界で起きていること、地球規模の課題、多文化共生に向けての課題等に関心をもち、自分事としてとらえようとするを「グローバル・シティズンシップ」として位置づけ、発達段階に応じた学習活動のあり方を明らかにしたい。

Ⅲ 研究計画

1. 実践研究の方法と調査対象

本研究における調査対象校であるA小学校は、平成27(2015)年度からESDの実践とその研究に取り組んでおり、平成30(2018)年度には、ユネスコスクールに認定された。以降、ESDの実践を教育課程に位置づけるためのカリキュラム開発に取り組んでいる。A小学校においては、ESDの学習活動として、国際理解教育の学習と地域学習を教科等横断的に構成し、教育課程に位置づけることで、系統的・継続的にグローバル・シティズンシップを育む学習活動に取り

組むことができるようにしている。

調査対象の子どもたちは、A小学校がESDの実践に取り組み始めた平成27(2015)年度に入学した。また、学級集団の約5割が外国につながる子どもたちであり、日本語指導が必要な子どもたちが常に在籍していた。そうした学級集団に対して、平成31(2019)年度から、令和2(2020)年度にかけて行った6本のESDの授業実践の記録と意識調査の分析をもとに、グローバル・シティズンシップを育む学習活動の検証を試みる。ESDの視点を取り入れた教科等横断的な学習活動を実践することを通して、子どもたちの意識にどのような変容がもたらされるのかを調査し、ESDの実践が児童の意識に与える影響について考察する。

2. 意識調査の方法

意識調査については、発達段階に応じたアンケートを作成し実施した。アンケートは、石森(2013)の研究結果をふまえて作成した。石森の研究においては、グローバル教育の指標項目とともに、「教師中心的一方向の評価ではなく、生徒を中心に置いた双方向性のある参加型アセスメントによる評価デザイン」⁴⁾のあり方についても示されており、教師と生徒が同様のアセスメントを用いることでその分析がなされている。本研究は、小学校におけるグローバル教育の評価方法についてまで言及するものではないが、石森によって示されたグローバル教育の指標項目が、小学校においてもグローバル教育の授業設計をする上で有効な指標になると考え、

表1 小学校におけるグローバル教育の指標⁵⁾

		指標項目
知識・理解	地球的課題	1.人権・環境・平和・持続可能な開発などについて基本的用語を理解している
		4.地球的課題のための様々な取り組みや活動について知っている
	多様性・多文化社会	5.人々の共通点や相違点に関心を払い、それらを見出すことができる
		6.地域、国、世界の多様性(文化・価値観・信条・アイデンティティー等)を認識している
グローバル社会・相互依存	7.多文化社会の現状を把握し、多文化共生社会づくりのための課題を理解している	
技能・スキル	批判的思考・問題解決	10.世界の問題を身近な事柄と結び付けて具体的に考えることができる
		11.他者の意見に耳を傾け、それに対する自らの意見を整理・表現できる
		12.バイアスやステレオタイプを自覚し、冷静な判断ができる
	コミュニケーション・協働	13.一つの事柄に対し、肯定的・否定的等多面的思考ができる。
		14.自らの考えを(言語を含めた)様々な方法で表現することができる
		15.自らの学びや意見を効果的に伝達(プレゼンテーション)できる
		16.全体の中で自らの役割を認識し、他者と協力しながらタスクに取り組むことができる
情報収集・活用	17.異なる意見に遭遇しても自らの見解を再構築し、合意形成できる	
	18.情報にアクセスし、必要な情報を収集し、それを目的達成のために活用することができる	
	19.課題解決のための探求テーマやプロジェクトを設定し、自ら調査・分析できる	
姿勢・態度・価値観	自己理解・自己認識	20.メディアや与えられた情報を冷静に分析する目をもっている
		21.自らの長所・短所を自己分析でき、良い点を伸ばそうとする。
		22.自分自身を大切に思い、自分自身の生き方を探求している
	異文化や多様性の尊重・寛容	23.困っている人々の問題を自らの問題に置き換えてとらえ、真剣に考えることができる
		24.考えや意見、タイプの異なる周囲の人とも協力しようと努力ができる
		25.自らに心の壁を作らず、社会的状況、家庭環境、民族、宗教等が異なる人ともコミュニケーションできる
地球市民	26.オープンマインドを持ち、様々な違いを認め、肯定的に受け止めることができる	
	30.よりよい未来をイメージし、それに対してすべきことを考え、実行できる	

表2 質問項目とグローバル教育の指標との関連⁶⁾

【グローバル教育の指標】			【質問紙】	
ドメイン	サブカテゴリー	指標項目		質問項目
知識・理解	地球的課題	1, 4	1	地球上で起きている問題を解決するために、世界の人々が協力していることを知っている。
	多様性・多文化社会	5, 6, 7	2	文化や習慣、言葉など、さまざまなちがいのある人たちが協力して生活する方法について考えたことがある。
	グローバル社会・相互依存	10	3	地球上で起きている問題と自分たちの生活とのつながりについて考えたことがある。
技能・スキル	情報収集・活用	18, 19	4	自分にとって必要な情報を、自分の力で調べることができる。
		20	5	事実と意見、本当のことで、そうではないことを区別することができる。
	批判的思考・問題解決	11, 12, 13	6	かたよった意見があることを知っているの、きめつけや思い込みで自分の考えをまとめないようにしている。
	コミュニケーション・協働	17	7	さまざま意見を大事にしなが、みんながなっとくする話し合いができるようにしている。
		14, 15	8	学習を通して、思ったことや考えたことを、みんなにわかりやすく伝えたいと思っている。
		16	9	みんなで、一つのことに取り組む時には、自分の役割を意識して協力することができる。
姿勢・態度・価値観	自己理解・自己認識	21	10	自分のよいところや、なおしたいことを知っていて、自分のよいところをさらに、よくしたいと思っている。
		22	11	自分のことを大切に、よりよい生き方をするために努力したいと思っている。
		23	12	困っていたり、悩んでいたりする人に対して、自分だったら何ができるかを考えて行動することが大切だと思う。
	異文化や多様性の尊重・寛容	24, 26	13	自分の文化や異なる文化のそれぞれのよさを認めて、大切にしている。
		25	14	人種、民族、宗教など、さまざまなちがいがあっても、コミュニケーションすることは大切だと思っている。
	地球市民としての自覚と責任、行動への意欲	30	15	よりよい地球をめざすためには、一人一人が責任をもって行動することが大切だと思っている。

グローバル教育の指標をもとにしたアンケートを作成することにした。

しかしながら、石森の研究結果によって示されたグローバル教育の指標項目は、30項目あり、加えて、高等学校の生徒を対象にしたものであることから、発達段階に即していない項目も見られる。そのため、小学校段階の子どもたちを対象にしたアンケートを作成するためには、まず指標項目を精査する必要があると考えた。

指標項目を精査するにあたっては、石森(2013)が用いた調査手法をふまえ、A市小学校教育研究会国際理解教育部所属の教員を対象にアンケートを実施し、その結果を考察した。それぞれの項目に対して、重要度認識と実践可能性認識を問い、国際理解教育における実践可能性認識と重要度認識の差の平均値が大きいほど、小学校において扱うことが難しい資質・能力ととらえて項目から除外するようにした。重要度認識については、国際理解教育の実践において取り上げたい資質・能力であるかどうかという視点、実践可能性認識については、アンケートの回答者自身が、これまでに実践したものと授業研究等で見たことがある実践で扱われていた内容に関係しているものについて回答するものとした。

教員へのアンケートの結果をふまえ、小学校段階の子どもたちに対して、実践に結び付きにくいと思われる項目を除外したものが表1である。これらの項目を小学校におけるグローバル教育の指標とし、この指標をもとに、小学校段階の子どもたちを対象としたアンケートを作成した。アンケートの作成にあたっては、発達段階を考慮し、質問項目を減らし、既習の言語表現に合うように文章表現を平易なものにする必要があると考えた。そこで、石森(2013)が作成した指標が、「知識・理解」「技能・スキル」「姿勢・態度・価値観」のドメインごとに3つのサブカテゴリーが設定されていることをふまえ、その枠組みを継承した上で項目を統合し、質問項目を減らした。質問項目と小学校におけるグローバル教育の指標との関連を表2に示す。

Ⅳ グローバル・シティズンシップを育む学習活動

1. 授業実践の概要

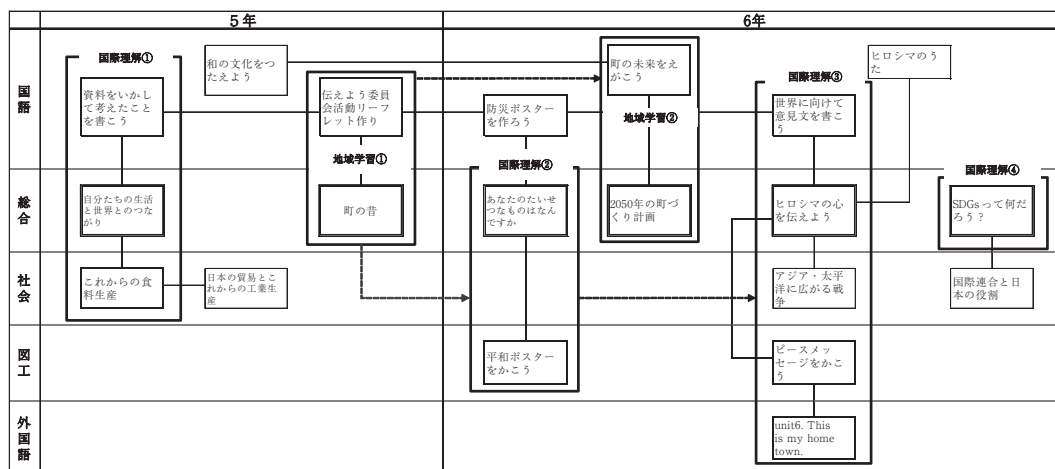
平成31(2019)年度から、令和2(2020)年度にかけて実施した調査対象の6本の授業は、以下(表3)のように教科等横断的に組み立てている。

国際理解①の実践(表4-1)においては、自分たちの生活が世界とつながっているということを社会科の食料自給率の学習を出発点に学習を進めた。世界で起きていることを知ることを通して、地球的課題に対する当事者意識と、多面的なものの見方を育むことをめざした。国際理解②の実践(表4-2)では、平和な世界を築くためにできることについて、自分たちにできることが学習のテーマとなっている。また、この学習は、国際理解③の実践(表4-3)につながることを意識して組み立てており、ヒロシマへの修学旅行に向けた平和学習となっている。地域学習①の実践(表4-5)も同様に、国際理解③につながる学習活動となっている。地域学習①は、自分たちの町の歴史について調べる学習であると同時に、第2次世界大戦において、空襲の被害を受けた町の復興についても学習する。自分たちの住む町の歴史を知ることを通して、町が様々な人々の思いに支えられていることに気づき、町に対する当事者意識を育むことをめざすとともに、原爆によって被害を受けたヒロシマの町の人々の思い、紛争地域で暮らす人々の思いについて考える学習へとつながっている。

地域学習②の実践(表4-6)は、1年生から積み重ねてきた地域学習の集大成となる学習活動となっている。自分たちの町についての知識を深めてきたこれまでの学習をふまえて、未来の町の姿について考える。現在の町のよさを生かし、課題に向き合う町づくり計画を考え、プレゼンテーションに取り組むことで、町に対する当事者意識をさらに育むことにつながる学習活動である。

国際理解④の実践(表4-6)は、これまでのESDの学習のまとめとして取り組んだものである。これまでの学びとSDGsとのつながりについて考えることを通して、持続可能な社会の担い手としての意識を高めることをめざした。

表3 ESDの学習の関連図(池田作成)



2. 授業の様子

(1)国際理解①「自分たちの生活と世界とのつながり」

【実施学年】第5学年 【実施時期】令和元(2019)年11月

学習の始めに、「植物油脂」が多くの食品に使われていることに対する興味関心を高めるようにした。普段、子どもたちが目にしている食品のパッケージを資料として使用し、自分たちの食生活と「植物油脂」が密接に関わっていることに気づくことができた。また、日本の食料生産の課題を振り返りながら、「植物油脂」の原料がインドネシアやマレーシア等から輸入されていることと、すべてを輸入に頼っているということ理解することで、自分たちの生活と世界とのつながりについて、課題意識をもつことができた。

次に、植物油脂の原料であるパームオイルの生産によって、輸入相手国の自然を破壊していることについての理解を深めた。熱帯雨林が破壊されている様子や、動物に対する被害、そこに暮らす人々の様子などの写真資料を通して、パームオイルを生産する過程で様々な問題が起こっていることを知り、自分たちの食生活がそれに関わっていることに対するジレンマを感じている様子が見えてきた。

さらに、パームオイルをめぐる問題が複雑にからみあっていることを知るために、「パーム農園開発計画についての関係者会議」のロールプレイを体験した。教材は、開発教育協会が作成した「パーム油のはなし(改訂版)」を使用した。自分が担当した立場に立って、パームオ

表4-1 国際理解① 指導計画(池田作成)

単元名	自分たちの生活と世界とのつながり		
実施時期	令和元(2019)年11月		
単元目標	食料生産に関わって、自分たちの生活と世界とのつながりに気づき、地球環境問題に対する意識を高めることができるようにする。		
評価規準	自分たちの暮らしとパームオイルの生産国に起きている問題とのつながりを理解している。〔知識・技能〕		
	資料からの情報を読み取り、読み取った情報を活用して、文章を書いたり資料を選択したりしている。〔知識・技能〕		
	パームオイルの生産に関わる関係者の様々な主張をもとに、パームオイルの生産に対する自分の考えをもつことができるようにする。〔思考・判断・表現〕		
	世界で起きていることを自分事としてとらえて、自分たちの暮らしを見直している。〔主体的に学習に取り組む態度〕		
学習活動計画(全9時間：〔社〕社会2時間・〔国〕国語3時間・〔総〕総合的な学習の時間4時間)			
次	時	学習活動	指導上の留意点
I	1	〔社〕「植物油脂」が自分たちの生活に欠かせないものになっていることに気づく。	・普段、目にする食料品の原材料として使われている「植物油脂」の原料(パームオイル)について理解できるようにする。
II	2~3	〔総〕パームオイルの生産が様々な問題を引き起こしていることを知る。 〔総〕熱帯雨林の役割と伐採による影響を知る。	・フォトランゲージに取り組み、様々な問題が起きていることを理解できるようにする。 ・熱帯雨林の破壊の影響が自分たちの生活と大きくかわることに気づくようにする。
III	4~6	〔総〕「パーム農園開発計画についての関係者会議」のロールプレイを体験する。 ・関係者のそれぞれの立場を理解する。 ・ロールプレイを体験する。 〔社〕自分たちの生活と世界との関わりについて考える。	・ロールプレイを通して、自分たちの生活に欠かせないパームオイルをめぐる、様々な意見が対立していることを理解できるようにする。 ・熱帯林や先住民族の生活環境を損なわない開発のあり方と自分たちの生活の利便性を比較して考えることができるようにする。
IV	7~9	〔総〕これまでの学習を振り返り、伝えたいことを整理する。 〔国〕ポスターを作成する。 〔国〕作成したポスターを交流する	・伝えたいメッセージとともに、適した資料を選ぶことができるようにする。 ・世界の人々とのつながりをふまえて自分たちの生活との関わりを表現できるようにする。 ・互いに伝えたいことを交流することで、学びを深めることができるようにする。

ルをめぐる様々な問題について考えることを通して、パームオイルを生産している国の環境破壊と自分たちの生活が密接に関わっているということを理解している様子が見られた。

- パームオイルは自分たちの生活に欠かせない。パームオイルには、いろいろな問題が起きている、作りすぎると、動物に害があるから、とても迷うところです。
- パームオイルはやっぱり必要だけど、いざ農園をつくるとなると、反対と賛成の意見はなかったから農園を作るかどうか悩むな。
- ぼくは、動物の命の方が大切だと思います。パームオイルは、どこかの空き地とか広いところで育ててやれば、動物たちの命は救われます。
- マレーシアだけでなく、いろんな人がいろんな立場で、物事を考えあつて、みんなが平等であるようにするためにはどうすればいいのかと考えている。

学習の最後に、「世界に伝えたいメッセージ」をポスターで表現した。ポスターの作成にあたっては、国語科「資料を生かして考えたことを書こう」との教科等横断的な活動として取り組んだ。日本語教室担当、特別支援教育担当と連携し、習熟度別の学習としたことで、それぞれの子どもたちの実態に合わせて学習を進めることができた。日本語の学習を始めて1年にも満たない子どもが、出来上がったポスターの発表に自ら進んで取り組む様子も見られた。

(2)地域理解①「町の昔～町はどのようにして作られるのだろう～」

【実施学年】第5学年 【実施時期】令和2(2020)年1月

まず、自分たちの暮らす町の歴史に対する関心を高めるために、A市の古い地図(江戸時代)を読み取る活動に取り組んだ。地図の中に、今も使われている町や通りの名前を見つけて驚くと同時に、自分の家や学校が地図上のどのあたりにあるのか興味を高める様子が見られた。さらに、町に点在する「歴史のかげら」を見つけるフィールドワークにでかけた。見慣れた町の風景の中に、歴史を感じさせるものがあることに改めて気づいた子どもも多く見られた。

次に、空襲の被害に焦点をあてて学習をすすめた。戦跡めぐりや平和資料館へのフィールドワーク、当時の様子がわかる写真資料をつかったフォトランゲージを通して、戦争は、人々のくらしを破壊するという、現在の町の姿が当たり前ではないということを改めて確認することができた。町の区画が変わっていないため、写真資料と今の町の様子を対比させやすかったということもあり、子どもたちにとっては、自分たちの町が、一度、空襲によって破壊され、その後人々の力によって復興したということが理解しやすかったのではないかと考える。広島への修学旅行に言及する様子も見られ、平和であることが「町がにぎわう」ためには必要なことであるという認識をもった子どもは多かった。

さらに、一度、焼野原になった町が現在の姿に復興していく過程を考えることを通して、町がそこに暮らす多くの人々の思いによって作られるものであるということに気づくことができた。また、地域の方から、戦争の頃の生活の様子や、戦争が終わった後の町の様子を聞く活動にも取り組んだ。「想像以上に戦争がおそろしいものだとわかった。」「今よりももっといい町

にしたい。」といった感想が見られた。聞き取り活動によって、想像が実感に変わっていく様子が見られた。

学習のまとめとして、これまで学習したことを伝える活動に取り組んだ。伝えたい内容ごとにグループを編成し、プレゼンテーションを作成した。様々な教材を通して、考え議論する中で、それぞれが自分たちの町の「昔と今」について考えている様子が見られた。

- ・昔から、ずっとにぎやかで、たくさんの歴史やみ力があると知って、すごい町だなと思ったし、とてもすばらしい町だなと思った。
- ・みんなが協力したから、今の町ができていることを再発見できた。
- ・この町は、昔から、すごく楽しそうだと思った。
- ・この町は、今あるみ力よりも、昔からあるみ力の方が多いと思った。
- ・この町は、たくさんのみ力と、戦争の歴史がたくさん残っているのが改めてわかった。
- ・この町は、歴史がたくさんあって、昔からにぎやかで、協力して町を作り上げたみ力がある。

表4-2 地域学習① 指導計画（池田作成）

単元名	町の昔～町はどのようにして作られるのだろう～		
実施時期	令和2（2020）年1月		
単元目標	自分たちが暮らす町がたどってきた歴史に対する関心を高め、これまでとはちがう視点で見つめなおすことを通して、町の新たな魅力を再発見できるようにする。		
評価規準	町がたどってきた歴史や町に対する人々の思いを理解している。〔知識・技能〕		
	当時の人々の思いを想像しながら、思ったことや感じたことを表現している。〔思考・判断・表現〕		
	自分たちの町に点在する「歴史のかけら」を通して、町に対する当事者意識を感じている。〔主体的に学習に取り組む態度〕		
学習活動計画	（全14時間：〔総〕総合的な学習の時間14時間〔国〕3時間）		
次	時	学習活動	指導上の留意点
I	1～4	〔総〕 オリエンテーションで学習計画を知り、見直しをもつ。 〔総〕 A市の古地図からわかることを整理し、昔の人々のくらしについて話し合う。 〔総〕 町に点在する「歴史のかけら」を見つける。（フィールドワーク①）	・どのような手順で学習を進めるのかを共通理解できるようにする。 ・町の昔の様子に興味をもつことができるようにする。 ・今のくらしの中にある「過去」に目を向けることを通して、町がたどってきた歴史に関心を高めることができるようにする。
II	5～7	〔総〕 空襲の被害について調べる。 ・焼野原になった町の様子 ・人々のくらし 〔総〕 平和資料館へ行き、空襲による町の被害を調べる。（フィールドワーク②）	・空襲によって、町が焼失した時の様子や人々のくらしの変化について、写真資料から考えることができるようにする。 ・平和資料館の見学を通して、町の被害の詳細について理解することができるようにする。
III	8～9	〔総〕 町がどのようにして現在の姿にまで発展したのかについて話し合う。 〔総〕 戦後の町の様子を知る。（聞き取り活動）	・焼野原から、現在にいたるまでの町の変化をたどりながら、人々の町の再生への思いについて考えることができるようにする。 ・町の復興に取り組んだ人の思いを知ることができるようにする。
IV	10～17	〔総〕 これまでの学習を振り返り、伝えたいことの内容や構成を考える。 〔総〕 それぞれが伝えたい内容のプレゼンテーションを作成する。 〔総〕 総合研究発表会をする。 〔国〕 リーフレットを作成する。 〔国〕 作成したリーフレットを読み合って、感想を伝え合い、学習を振り返る。	・これまでの学習を振り返り、町の昔と今について考えることができるようにする。 ・伝えたい内容ごとにグループを作り、発表会の準備をする。 ・これまでの学習の成果を振り返ることができるようにする。 ・グループごとにリーフレットのそれぞれのページを作成できるようにする。 ・交流を通して、町の新たな魅力を再発見できるようにする。

このプレゼンテーションの後、国語科の学習との教科等横断的な活動として、リーフレット作りを予定していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けた全国一斉休校措置により、学習活動の継続ができなくなり、作成まで至らなかった。自分たちが学習したことをリーフレットという形でまとめ、地域に発信するという計画に対する意欲が高まっていたこともあり、心残りのある実践となった。

(3)国際理解②「もっと話そう！平和を築くためにできること～あなたの大切なものはなんですか～」

【実施学年】第6学年 【実施時期】令和2(2020)年7月

「平和」に対するイメージの共有を図ることから学習を始めた。「戦争がないこと」だけを「平和」とするのではなく、日常生活に関わることが多くあるということに話し合いを通して、多くの子どもたちが気づくことができた。

次に、写真絵本「あなたのたいせつなものはなんですか」(小学館)を読み、自分たちの生活とは異なる状況にある子どもたちの「たいせつなもの」と自分たちの「たいせつなもの」の相違点について考えた。本当に「たいせつなもの」は、住んでいる国や地域がちがっても変わらないということや、戦争の影響や生活の状況によって「ちがいが」生まれているということに気づく様子が見られた。

表4-3 国際理解② 指導計画(池田作成)

単元名	もっと話そう！平和を築くためにできること～あなたの大切なものはなんですか～		
実施時期	令和2(2020)年7月		
単元目標	未来を担う当事者意識を育み、平和な世界の構築に向けて、自分たちにできることを考えることができるようにする。		
評価規準	平和な世界の構築に関わる出来事や取り組みについて、世界で起きていることを自分たちの生活と結び付けて理解している。〔知識・技能〕		
	様々な意見をもとに、自分の考えを再構築しながら、課題解決に向かう方法について考えている。〔思考・判断・表現〕		
	よりよい地球をめざすための行動について、積極的に話し合っている。〔主体的に学習に取り組む態度〕		
学習活動計画(全13時間：〔総〕総合的な学習の時間8時間・〔図〕図工5時間)			
次	時	学習活動	指導上の留意点
I	1	〔総〕「平和」のウェビングマップをつくる。	・「平和」に対するイメージをふくらませ、「平和ってどういうこと?」という問いに対する自分の考えをもつことができるようにする。
II	2～3	〔総〕絵本「あなたのたいせつなものはなんですか」を読む。 〔総〕なぜ、「たいせつなもの」にちがいが生まれるのかについて話し合う。	・自分の「たいせつなもの」と絵本の中に出てくる子どもたちの「たいせつなもの」とのちがいに気づくようにする。 ・本当に「たいせつなもの」は、住んでいる国や地域やちがっても変わらないことに気づくようにする。
III	4～6	〔総〕紛争下の子どもたちの様子から、戦争が人々の生活に与える影響について考える。 〔総〕紛争地域に住む子どもたちの願いをかなえるために国際社会ができることについて考える。 〔総〕人々の「平和」が守られる世界について考える。	・世界各地で戦争が続いていることを知るとともに、その影響を大きく受けているのが子どもであることに気づくようにする。 ・マララ・ユスフザイのスピーチを通して、若い世代が世界を変えようとする動きがあることに関心を高めることができるようにする。 ・「平和のウェビングマップ」や「たいせつなもの」から様々な平和の形があったことを思い出し、人々の「平和」が守られる世界がどのような世界なのかについて互いの考えを交流できるようにする。
IV	7～13	〔総〕これまでの学習を振り返り、「平和」に対する自分の考えを整理する。 〔図〕平和ポスターを作成する。 〔図〕完成したポスターを鑑賞する。	・「私たちは、～世界で生きる。」のキャッチフレーズに合わせて、ピースメッセージとして整理する。 ・作成したポスターをもとに、平和な世界に対する自分の思いや考えを伝えることができるようにする。 ・作品の交流を通して、学習の成果を確かめ合い、修学旅行に向けて意欲を高めることができるようにする。

また、紛争下の子どもたちの生活を知る学習にも取り組んだ。ユニセフが作成した「教えて！ユニセフ先生～紛争と子ども編～」を視聴し、紛争下の子どもたちの生活の様子や「願い」について考えることができた。さらに、この学習のテーマである「平和を築くためにできること」について考えるために、「世界一大きな授業2017」(JNNE)の資料を活用した。世界中の多くの子どもたちが学校に通うことができていない現実や、軍事費と教育費の格差、マララ・ユスフザイさんの国連でのスピーチの様子を知ることを通して、自分たちが「平和を築くためにできること」について考える意味について考えるきっかけとなるようにした。こうした学習の積み重ねによって、戦争によって、多くの人々が傷ついている状態が、自分たちの生活と切り離された先で起こっているのではなく、つながるその先にあるという気づきにつながっていった。

学習のまとめとして、平和ポスターの作成に取り組んだ。ポスターの作成にあたっては、これまで学習してきたことをもとに、平和ポスターで伝えたいメッセージについて考えた。伝えたいメッセージについては、「私たちは、『 』世界に生きる。」と表現するようにした。これは、国連広報センターが作成した「We the people：持続可能な目標を伝えよう」の動画の中の“ We will live in the world～”のフレーズを活用したものである。動画の視聴を通して、いろいろな国の若い世代がSDGsに対して、自分の思いや考えをもっているということを知り、ポスターで自分たちの考えを発信することに意欲を高める様子が見られた。また、このメッセージを修学旅行における活動の一つであるインタビュー活動でのピースメッセージの交換で活用するという見通しをもつことで、修学旅行に向けての学習に対しても関心を高めている様子も見られた。

- 「私たちは、『人の命が大切にされる』世界に生きる。」
戦争が多い。人の命が亡くなっています。命は大切なものです。だから、私は人の命が大切にされる世界に生きたいです。
- 「私たちは、『だれもが助け合いでつながっている』世界に生きる。」
助け合いをしたら、争いは起きないと思って、離れていてもつながっているという思いを伝えたい。
- 「私たちは、『外国人も日本人も、仲がいい』世界に生きる。」
外国人も日本人も、みんながなかよくなれば平和になると思う。差別のない世界がいいと思う。
- 「私たちは、『みんなが学校に行ける』世界に生きる。」
すべての子どもが学校に通えるようにしたい。だれもが勉強して、将来の夢をかなえる世界にしたい。世界の人たちが平等に勉強ができる世界を作るのは国のリーダーだけじゃなく、国民もいっしょに作っていく必要がある。
- 「私たちは、『みんなが大切な物を大切にできる』世界に生きる。」
みんなの大切な物は、それぞれ違うと思う。もし、同じだとしても理由は、ちがう。人が、それぞれ大切な物があるのは、おかしいことでも、はずかしくもない。人が大切な

物があってもいいという思いを伝えたい。

(4)地域理解② 町の未来をえがこう～2050年の町づくり計画～

【実施学年】 第6学年 【実施時期】 令和2(2020)年11月

初めに、「2050年の未来」について、イメージを共有し、未来がどんな町になっているのかを自由に発表し合うことで、イメージをふくらませることができた。多くの子もたちが自分が抱いたイメージを発表し合い、活発な話し合いの様子が見られた。自分たちの住む町の未来の姿を考える、この学習に対する関心の高さがうかがえた。また、学習活動の最終目標である地域の人たちに対するプレゼンテーションについては、昨年度の6年生のプレゼンテーションに参加したこともあって、多くの子もたちが取り組みに対する意欲を高めていた。

町づくり計画を作成するにあたっては、現在どのような町づくりが行われているかについて調べる活動を通して、町づくりに対する見通しを持つことができるようにした。地域を紹介す

表4-4 地域学習② 指導計画(池田作成)

単元名	町の未来をえがこう～2050年の町づくり計画～		
実施時期	令和2(2020)年11月		
単元目標	未来の町づくり計画に対する自分の考えを明確に表現する活動に取り組むことを通して、町に対する当事者意識をもてるようにする。		
評価規準	町づくりに関わる人々の思いや、自分たちの住む町の様々な取り組みについて理解している。〔知識・技能〕		
	自分たちが住む町のよさや課題について考え、「人とのつながり」を重視した町づくりについて考えている。〔思考・判断・表現〕		
	自分たちが住む町の未来に関心をもち、進んで自分の思いや考えを伝え合っている。〔主体的に学習に取り組む態度〕		
学習活動計画(全17時間：〔国〕国語7時間・〔総〕総合的な学習の時間10時間)			
次	時	学習活動	指導上の留意点
I	1～2	〔総〕2050年の町の様子について話し合う。	・2050年の未来の町のイメージをウェビングの手法を用いて広げることができるようにする。 ・これまで取り組んできた地域学習を思い出しながら、現在の町の様子を全体で共有するようにする。
		〔総〕現在の様子について話し合う。	
II	3～7	〔総〕現在、行われている町づくりについて調べる。	・地域で実際に行われている取り組みの様子を知ることを通して、どのような視点で町づくりが行われているのかを考えることができるようにする。 ・聞き取り活動を通して、住んでいる町を大切にしたいという思いが行動につながっているということに気づくようにする。
		〔総〕自分たちが暮らす町の現在の姿を町のよさや課題から考える。	
III	8～15	〔総〕自分たちが住む町の「町の幸福」について考える。	・筆者の問いかけをふまえ、町づくりのテーマについての話し合いを深めることができるようにする。 ・前時で話し合った内容をふまえて、「町の幸福」が実現できる未来の姿について、考えをまとめるようにする。 ・思い描いた未来の町を実現する取り組みについての自分の考えを整理できるようにする。 ・互いの意見の交流や「町の幸福論」の筆者からのアドバイスをもち、2050年未来の町づくり計画について具体的な取り組みについて考えることができるようにする。 ・意見交流をふまえて、構成を考え、必要な資料を作成し、伝える方法を工夫することができるようにする。 ・地域の町づくりに関わる人々に対して、これまでの学習をふまえて、町づくりへの思いを明確にしたプレゼンテーションを行うことができるようにする。
		〔国〕町の未来像を考える。	
		〔国〕思い描いた未来の町を実現する方法について考える。	
		〔国〕2050年の町づくり計画について話し合う。	
		〔国〕プレゼンテーションを作成する。	
		〔国〕「2050年町づくり計画」発表会を行う。	
IV	16～17	〔総〕自分の未来年表を作る。	・30年後の町で、自分がやってみたいことや、なりたい職業など、自分の将来について考えることができるようにする。 ・「なりたい自分」に向かう意欲や希望をもつことができるようにする。
		〔総〕未来の自分へ手紙を書く。	

るパンフレットやチラシなどからわかることも多く、自分たちの町で行われている取り組みを初めて知る児童も少なくなかった。また、実際に地域で活動をしている人たちからの聞き取りにも取り組んだ。人と人とのつながりを築くために様々な人たちが思いをもって行動していることを知ることができた。そうした人たちによって、町が支えられているということに気づいた子どもは多かった。さらに、1年生からの町についての学習をふりかえりながら、現在の町のよさや課題について話し合った。普段、子どもたちが感じている課題としては、「ごみが多い」「緑が少ない」といった環境面での意見が多く見られた。よさについては、「町のためにがんばっている人がいる」「商店街や店が多い」「にぎやか」「食べ物がおいしい」「観光地が多い」といったこれまでの学習の蓄積をうかがわせる発言が多く見られた。

また、これらの学習を国語科の「町の幸福論—コミュニティーデザインを考える—」（東京書籍）の学習と並行して取り組むことにより、筆者の問いかけでもある「町の豊かさとは何か」という基軸に沿った学習を展開することができた。未来の町づくり計画を作成するにあたっては、自分たちの町のよさを生かし、課題を克服する計画が、「町の豊かさ」とどのようにつながっているのかという視点を常に意識しながら、話し合い活動を進めることができていた。プレゼンテーション作りは、それぞれの子どもたちが抱いた課題意識に分かれたグループで取り組んだ。環境にやさしい町づくりを目指したグループもあれば、コロナ禍によって寂しくなった町に以前のようにたくさんの人が訪れるようになるための方法を考えるグループもあった。また、ユネスコスクールである自分たちの学校の特徴を生かして、町の人たちが学校に来て、環境について学び、地球環境をよくする取り組みを自分たちの学校から行っていくというアイデアを出したグループもあった。これまでの学習で得た知識や経験をもとに町づくりのアイデアについて意見を交流している様子が見られた。

プレゼンテーション当日は、保護者や地域の人、行政からの参加もあり、子どもたちは緊張している様子だった。終わった瞬間に、大きく息をはいた子どもたちの様子が印象的だった。それでも、一つ大きなことを成し遂げたという達成感にあふれ、「楽しかった。」「緊張したけれど、うまく行ってよかった。」と準備してきたことをしっかりと伝えることができたという思いにあふれていた。

学習の最後に、自分たちが考えた町で、自分たちがどのように生活をしているのかを想像しながら、未来年表を作成した。未来の自分に思いを馳せることで、「なりたい自分」をイメージし、そこに向かおうとする意欲や希望をもつ様子が見られた。

- ・自分がやりたい仕事で生活できることを願って、これからがんばりたい。
- ・自分の未来を考えるのは難しかったけど、未来では活やくする仕事をしたいと思いました。
- ・子ども食堂にたくさん行っているの、いろいろな先生に恩返ししたいなと思いました。
- ・実際に今日書いた通りになるようにがんばろうと思いました。

(5)国際理解③ 「もっと話そう！平和を築くためにできること～ヒロシマの心を伝えよう～」

【実施学年】第6学年 【実施時期】令和2(2020)年12月

1学期の学習をふまえて、広島に修学旅行に行くことの意味について話し合った。世界中から多くの人たちが訪れる場所であり、人々がどのような思いで広島を訪れるのかということについて話し合うことで、修学旅行に向けての学習に対して意欲を高めることができていた。

コロナ禍において、修学旅行が実施できるかどうか分からない中での学習活動であったが、現地での活動をふまえて、資料館にある展示物や平和記念公園内の記念碑についての調べ学習に取り組んだ。調べ学習のために、「平和学習ノート」を作成した。「平和学習ノート」では、資料館に実際に展示しているものを写真資料として提示し、「今、感じたこと」と「実際に見て、感じたこと」の2種類の記述ができるようにすることで、実際に現地に行った時に学びを振り返りながら見学できるようにした。また、それぞれの資料の詳しい情報を調べることができるように、資料館のホームページにリンクしたQRコードを作成し、各ページに掲載したことで、個々の興味関心に即した学習環境を整えるようにした。そうした手立ての工夫によって、主体的に学習に取り組む様子が見られた。具体的な原爆被害についての学習については、写真資料や映像資料を活用しながら、丁寧に学習をすすめた。学びを進めるごとに、子どもたちの修学旅行に対する思いが強くなっていく様子が見られた。

資料館の展示物の中には、目をそむけたくくなるような写真資料や記述がある。しかし、そうした原爆被害の実相にふれ、学びを深めていくことが、修学旅行で広島に行くという意味につ

表4-5 国際理解③ 指導計画(池田作成)

単元名	もっと話そう！平和を築くためにできること～ヒロシマのこころを伝えよう～		
実施時期	令和2(2020)年12月		
単元目標	戦争によってもたらされた苦しみや悲しみを理解し、平和な世界の構築に向けて、自分たちができることについて考え、行動することができるようにする。		
評価規準	ヒロシマについての学習を通して、戦争によってもたらされる苦しみや悲しみを理解している。〔知識・技能〕 様々な意見をもとに、自分の考えを再構築しながら、課題解決に向かう方法について考えている。〔思考・判断・表現〕 平和な世界の構築に向けて、自分たちの役割を認識し行動しようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕		
学習活動計画	(全16時間：〔学〕学活1時間、〔外〕外国語1時間、〔国〕国語3時間、〔図〕図工1時間、〔総〕総合的な学習の時間10時間)		
次	時	学習活動	指導上の留意点
I	1～2	〔学〕ヒロシマへ行く意味について話し合う。 〔総〕絵本「伸ちゃんのさんりんしゃ」を読む。	・ヒロシマへの修学旅行に関して、課題意識をもつことができるようにする。 ・原爆投下がどのような結果をもたらしたかを理解し、ヒロシマに関する学習に関心を高めることができるようにする。
II	3～8	〔総〕原爆の被害について調べる。 ・平和記念資料館ハンドブック ・広島平和記念資料館HP 〔総〕平和公園内にある様々な碑について知り、それぞれの碑を設立した人々の思いについて話し合う。 〔総〕サダコさんに起きたことと、「原爆の子の像」の設立の経緯を知る。	・原爆投下後の広島街の様子や、人々の様子について調べ、原爆がもたらした被害について理解できるようにする。 ・それぞれの「碑」に込められた思いを知り、広島の人々の平和に対する願いや思いを感じることができるようにする。 ・原爆のおそろしさを伝え、平和な世界を願った人々の思いについて考えることができるようにする。
III	9～12	〔総〕ピースメッセージを考える。 ピースメッセージ交換の準備 〔外〕インタビューの練習 〔図〕メッセージカードの作成	・前時での学習をふまえて、世界の人々に伝えたいピースメッセージについて話し合うことができるようにする。 ・外国人観光客との交流を想定して、英語を使ったコミュニケーションの練習をすることができるようにする。
IV	13～16	〔総〕修学旅行で思ったことや感じたことを整理する。 〔国〕「平和を築くためにできること」についての意見文を書き、交流する。	・これまでの学習を振り返り、「平和な世界を築くためにできること」について考えることができるようにする。 ・これまでの学習で思ったことや考えたことを共有し、平和な世界を築く当事者としての意識を高めることができるようにする。

いて考えることにつながるのだということを全体で共通理解しながらすすめるようにしたことで、意識が高まる様子が見られた。「自分たちがヒロシマに行く意味は何か。」ということに対して一人一人が真剣に向き合い、学習を進めることができた。修学旅行前の最後の学習として、取り組んだピースメッセージの作成にもそうした様子が見られた。個々が作成したメッセージをもとに、学級全体で一つのメッセージを作成する予定であったが、子どもたちの「どれもけずりたくない。」という思いが強く、一つにしぼることができなかった。

- 私たちが、この世界を平和で幸せな国にします。
- 人をきずつけない世界にし、平和は守るとちかいます。
- お互いの大切な宝物を守り合って、笑顔あふれる世界に生きる。
- みんなで平和をつなげていこう。世界のために、命を守るために。
- 世界中の人々がお互いのことを知るために、もっと話をし、平和な世界を作りあげよう。
- ずっと平和でいられる世界をつくることを千羽鶴にちかいます。
- 私たちが幸せな世界にすることを千羽鶴にちかいます。
- 平和はひとりひとりの心から。大切な宝物を守り合って、平和な世界にすることをちかう。

現地での学習は、充実したものになった。見学者がほとんどいなかったこともあり、資料館の見学に十分に時間をとることができた。これまで積み重ねてきた学習を思い出しながら、展示物をじっくりと見ている様子が見られた。特に、子どもたちの関心が高かったのは、「千切れたり、血に染まったりした衣服」や「黒い雨のあとが残る白壁」、「しんちゃんのスニーカー」だった。佐々木禎子さんの折った小さな折り鶴にも関心を寄せていた。これまで学習してきたものを目の当りにしている様子は真剣そのもので、思ったことや感じたことを熱心にメモに取る姿が見られた。

最後に、学習のまとめとして、「平和を築くためにできること」という題で作文を書く活動に取り組んだ。学習を通して感じたことや思ったことを整理しながら、この学習に対する一人一人の思いを表現することができた。また、互いの作品を交流することで、修学旅行に向けて取り組んだこと、修学旅行での体験を改めて振り返っている様子が見られた。

- 新井さん(被ばく体験者)が言っていたように、私たちも、その次の人たちも、次の世代へと残していこうと思います。
- 今、ぼくたちがふつうに過ごしているのがとても平和で、すごいことだと思った。広島に行き話を聞いたりして、前までのぼくたちにはなかったものをこの勉強を通してゲットできたと思います。
- 今までの学習で、たくさんことを知りました。今までもこれからも、もっとこの学習をして、ずっとずっとヒロシマが大変になったことを忘れずに、戦争の恐ろしさ、平和の大切さを伝えたいです。
- 戦争で傷ついて、悲しいと思っていることを知りました。いろんなものが焼けていて、そ

れを見て泣きそうになりました。また、いつかまた広島に行きたいです。

(6)国際理解④ 「SDGsって何だろう？」

【実施学年】 第6学年 【実施時期】 令和3(2021)年3月

SDGsのロゴマークを目にしたことのある子どもは多く見られた。詳細については、理解していなかったため、17個の目標についての概略を示した上で話し合い活動に取り組むようにした。

まず、「地球温暖化」がどの目標と関りがあるかについて、意見の交流をした。Goal.13という意見の他に、Goal.7, 11, 15, 16といった意見があがった。それぞれの目標についての説明をまとめた資料をもとに、地球温暖化によって引き起こされる様々な問題を想定し、目標と結び付けている様子が見られた。

次に、グループごとに、写真資料で示した課題の解決につながるSDGsの目標について考える活動に取り組んだ。「地球温暖化」について全体で意見交流をした時と同様に、写真の中で起きている課題を見つけ、その課題が地球の環境、あるいは人々の生活にどのような影響をもたらすのかを想定して、目標について考えることができていた。さらに、それぞれの目標に対して、自分たちにできることについて考える活動にも取り組んだ。自分たちの生活の中で実現可能な取り組みという点で、話し合いが進まない様子も見られたが、課題について深く考えることができていた。「エコバックを使う。」「無駄づかいをしない。」「募金活動に取り組む。」「3Rを心がける。」といった意見の他に、「SNSを通して、学んだことを発信する。」「みんなに知らせる。」のような発信型の意見も見られた。

表4-6 国際理解④ 指導計画(池田作成)

単元名	SDGsって何だろう？		
実施時期	令和3(2021)年3月		
単元目標	地球上で起きている様々な課題を解決することに対して当事者意識をもつことができるようにする。		
評価規準	SDGsで示されている課題が、自分たちの生活とつながりがあることに気づいている。〔知識・技能〕		
	目標達成のために、自分にできることについて考えている。〔思考・判断・表現〕		
	よりよい地球をめざすための行動について、積極的に話し合っている。〔主体的に学習に取り組む態度〕		
学習活動計画	〔総〕総合的な学習の時間2時間		
次	時	学習活動	指導上の留意点
I	1	・SDGsについて知る。	・現在、世界が様々な課題を抱えていることを確認できるようにする。 ・持続可能な世界を築くために、2030年までに世界が共通して取り組まなければならない目標があることを理解できるようにする。 ・写真資料で示した課題につながる目標について考える。
	2	・SDGsと自分たちの生活とのつながりについて考える。	・課題解決のために示されている目標と自分たちの生活とのつながりについて考えることができるようにする。 ・これまで、SDGsにつながる学習を積み重ねてきたことを確認するとともに、行動へとつながる当事者意識の向上を促すことができるようにする。

- この17個の目標は、子どもでは何もできないと思っていたけど、一人一人の意識や募金、SNSなどの声かけなどで私たちにもできることがあるなとも思ったから、行動していきたいです。
- 自分たちが何気なく生活していただけたのに、世界中が自分たちの生活がつながっていることを改めて、この学習で学んだと思い始めました。
- 地球にいる人類の課題がこんなにあって、自分たちが何をすればいいかと学んで、この課題をみんなに伝えて大きくしていかなければいけないと思った。
- ぼくたちの、ちょっとした行動が地球にある問題を解決したり、ぼくたちの生活が世界につながっていったりすることが分かりました。ぼくたちにできることを見つけて実行することが大切だと思います。

3. 意識調査の結果と分析

児童へのアンケート(質問項目については、表2参照)は、国際理解②の授業後、地域学習②と国際理解③の授業前後、国際理解④の授業後に行った。質問項目に対しては、「とても思う：5」から、「思わない：1」の5段階で回答するようにした。回答4，5については肯定的回答、回答1，2については、否定的回答として、アンケート結果(表6参照)を分析する。

(1) 【知識・理解】

【知識・理解】の項目では、〔質問2〕に大きな変容が見られた。〔質問2〕は、「文化や習慣、言葉などさまざまな思いや考えをもった人たちが協力して生活する方法について考えたことがある」である。

国際理解②の授業後のアンケートでは、「とても思う」と回答した子どもの割合とほぼ同じ割合で、「あまり思わない」と回答している様子が見られた。また、中間層が多いのも特徴的である。その後、学習を重ねるごとに、「あまり思わない」と回答する子どもの割合とともに、中間層の割合も減っていき、国際理解④の授業後のアンケートにおいては、80%近くの子どもたちが肯定的な回答をするに至った。

アンケート対象の国際理解の学習活動については、相互依存関係や平和学習といったグローバルイシューを題材としており、文化や習慣、言葉といった文化的多様性を扱っていない。そのため、子どもたちの「文化や習慣、言葉など、さまざまなちがいがいる人たち」に対する思いや考えは希薄であると考えられる。その点から考えると、国際理解②の授業後のアンケート結果は、子どもたちの思いや考えがそこまで至らなかった結果であるともいえる。しかしながら、地域学習②の学習後以降、肯定的回答の割合が増えていることから、地域学習②が子どもたちの意識に影響を与えた可能性があると考えられることができる。

地域学習②においては、自分たちが住む町の未来像を考える過程において、町に関わる様々な人たちの思いや考え、協力に基づいて町づくりが行われているということを学習する。実際に、そうした町づくりに携わる人からの聞き取り活動に取り組んだり、実際の町づくりの中心である行政の人たちに対してプレゼンテーションを行ったりしたという経験が、「協力して生

活する方法」を考えたことがあるという意識につながったのではないかと考える。

その後の、中間層の減少と肯定的回答の割合の増加は、地域学習において、子どもたちがグローバル 이슈を自分事としてとらえる視点をもつことができたという学習の成果につながったものと考えられることができる。

(2) 【技能・スキル】

【技能・スキル】の項目の肯定的回答の水準が、【知識・理解】、【姿勢・態度・価値観】と比べて全体的に低い傾向にある。特に〔質問7〕と〔質問9〕にそれが見られる。〔質問7〕は「さまざまな意見を大事にしながら、みんなが納得する話し合いができるようにしている」、〔質問9〕は「みんなで一つのことに取り組む時には、自分の役割を意識して協力することができる」である。

これらの項目については、肯定的回答の割合が学習を重ねるごとに増加しているものの、否定的回答の割合が総体的にはあまり変化が見られない。否定的回答に変化が見られなかったという点を考えれば、アンケート対象の学習活動の指導計画では、これら2つの技能・スキルの向上を図ることが難しいという結論に至る。

しかしながら、この2つの項目で問われていることについては、こうした学習に限らず、すべての学習活動にもあてはまるものであり、普遍的な技能やスキルとも言えることから、学級の一定数の子どもたちがグループ活動に対する苦手意識をもっている可能性も否めない。こうした点を考えると、「グローバル・シティズンシップを育む学習活動」として取り組む学習活動以外においても、これらの【技能・スキル】を意識した取り組みが重要になってくると考える。身に付けた知識や技能を適切な場面で生かすことができる学習活動計画、ひいては教育課程の策定がこれらの【技能・スキル】の向上につながるものと考えられる。

つまり、より効果的な学習活動であるためには、カリキュラムマネジメントが必要であり、それは、「グローバル・シティズンシップを育む学習活動」のみならず、教育課程全体の質の向上につながるものと考えられることができる。

(3) 【姿勢・態度・価値観】

【姿勢・態度・価値観】の項目においては、〔質問10, 11, 12〕を中心に「自己変容・自己理解」に関する項目に注目した。〔質問10〕は、「自分のよいところや、なおしたいことを知っていて、自分のよいところをさらに、よくしたいと思っている」、〔質問11〕は、「自分のことを大切に、よりよい生き方をするために努力したいと思っている」、〔質問12〕は、「困っていたり、悩んでいたりする人に対して、自分だったら何ができるかを考えて行動することが大切だと思う」である。

〔質問10〕、〔質問11〕については、授業の積み重ねによる変容がほとんど見られなかった。一方、〔質問12〕については、学習を重ねるごとに肯定的回答が増え、最終的には否定的回答が0%となった。それでも、否定的回答の割合は、国際理解③の学習後まで、〔質問10〕と〔質問11〕と同等数見られ、学習を積み重ねても変容しなかった層が一定数いたことがわかる。しかしながら、SDGsを題材にした国際理解④の学習後のアンケート結果で、〔質問12〕だけが否定的回答をする子どもが見られず、〔質問10〕と〔質問11〕とは大きく異なる結果となった。

〔質問10〕と〔質問11〕については、子ども自身の生き方にも通じるところでもあることから、日々の生活の影響を受けやすい。そのため、学習内容と関わって、自身のよさや生き方を考える場面を設定しなければ、学習活動の成果としての自己変容・自己理解には結びつかないのではないかと考える。一方、〔質問12〕については、学習内容が子どもの意識の変容に大きな影響をもたらすことを示しているのではないかと考える。これまで、子どもたちは、アンケート対象の学習活動に限らず、「自分だったら何ができるか」という視点が含まれた学習活動に取り組んできている。しかしながら、これまでの学習では「自分だったら何ができるか」という意識をもつところまで至らなかった一定数の子どもたちに意識の変容が見られたことを考えると、SDGsという題材が、子どもたちにとってインパクトのある題材であったということを示しているのではないかと考える。

以上の分析結果より、グローバル・シティズンシップに関わる知識、価値観については、学習に取り組むことによって、身に付けることができるものであり、小学校段階の児童であっても、十分に理解できるものであるということがわかった。一方で、調査対象の4つの学習活動は、教科等横断的に組み立てられ、教科学習を意識したものになっていたのにも関わらず、技能・スキル面での肯定的回答の水準が低かったことから、横断的に取り組んだ教科での学びが十分に生かされていないことがわかった。情報活用、批判的な思考力といった技能・スキルは、積み重ねによって身に付く資質・能力である部分が大きく、ESDの学習を積み重ねただけで身に付くものではないという認識のもと、さらなるカリキュラムマネジメントによって、児童が身に付けた技能・スキルを生かして学習に取り組むことができる教育課程の策定をする必要があると考える。

また、今回は、アンケートによって、子どもたち自身が自分たちの学びを確認するという段階には至らなかったが、アンケートのもととなった15の指標項目については、グローバル・シティズンシップを育む学習活動の授業設計のための指標になり得るということは示すことができた。15の指標項目をもとに、学習後の子どもたちの姿を見据えた上で、教科学習との有機的なつながりを見極めた学習活動を組み立てていくことで、グローバル・シティズンシップを育む学習活動を系統的・継続的な取り組みとして実現できるのではないかと考える。

V グローバル・シティズンシップを育む視点

様々なメディアを通して、あるいは、日常生活を通して、子どもたちは多くの「グローバル」な事象に触れている。また、教科書を使用した通常の学習活動の中にも、異なる文化や様々な国や地域のくらしの様子、世界で起きていること、地球規模の課題、多文化共生に向けての課題に関わることは多く見られる。にもかかわらず、「グローバル・シティズンシップ」を定義し、あえて学習活動を開発し実践する必要があるのはなぜなのか。それは、教科学習においては、異なる文化や様々な国や地域のくらしの様子、世界で起きていること、地球規模の課題、多文化共生に向けての課題についての学びを「自分ごと」としてとらえるという視点が欠けているからであると考える。

奈須(2019)が「子どもたちは関連する断片的な知識や経験を膨大に所有しており、すでに何らかの概念を予断や先入観として形成している。知識を教えるとは、それをより妥当性の高い本質的なものへと自力で修正・洗練・統合していけるよう、教師が導き、支えることに他ならない。」⁷⁾と指摘するように、多文化共生社会の実現に向けた課題や地球的課題に対する知識を得るだけではグローバル・シティズンシップは育まれない。そこに教師による適切な導きが必要であるということだ。SDGsに掲げられているような、壮大で複雑で困難な課題を子どもたちの手元に引き付けるためには、世界で起きていることをいかに「自分ごと」としてとらえることができるかということにかかっている。子どもたち自身が、学習によって得たことを既にもっている知識や体験とつなげ、自分の手の届く生活の中において、もう一度、考え直す作業が必要であるということである。つまり、学習活動においては、グローバルな視点とローカルな視点の両方が必要であり、その二つの視点の往還によって、「より妥当性の高い本質的なものへと自力で修正・洗練・統合」し、「自分ごと」としてとらえることができるようになることを考える。

グローバル・シティズンシップを育むためには、子どもたちにとって身近ではない事柄を「自分ごと」にすることが鍵となってくる。これまでの授業実践を通して見いだした、学習活動を組み立てる上の鍵となる4つの視点を〔表5〕に示す。まず、基本となるのが「自分や友だちを大切にする」という視点である。自分を大切にできる子どもは、友だちも大切にできる力があり、自分のとなりに座っている友だちを知ろうとする思いは、遠く離れたところに住む世界の人々の生活を想像しようとすることにつながると考える。「地域のことを知る」という視点とともに、「世界」との比較対象としてのローカルな視点として、まずは自分たちの身の回りのことを理解することが必要であると考えられる。

また、「世界がつながっていることに気づく」ということは、今日の世界の危機的な状況を自分ごととしてとらえるための重要な視点となる。自分たちの生活の快適さや便利さが誰かの犠牲の上に成り立っているという気づきは、世界中の人々に対するエンパシーを育み、自分にできることを考えようとする当事者意識の芽生えにつながるものと考えられる。加えて、身近で起

表5 グローバル・シティズンシップを育む4つの視点⁸⁾

Four perspectives for developing global citizenship	
Respect themselves and their friends	Know about their community
Students who respect themselves can also respect their friends. Students trying to find out about their friends sitting next to them can imagine people living on the other side of the globe.	Students can develop abilities to see what is happening in the world from a local perspective.
Students can develop abilities to think about things both of local community and of the world from a global perspective.	By realizing that a comfortable and convenient life comes at the expense of someone, students can foster empathy to lives of people around the world.
Know the diversity of the world	Notice that the world is connected

きていることや世界で起きていることをグローバルな視点で考える力を育むためには、「世界の多様性を知る」ことは欠かすことはできないだろう。自分との「ちがいを」感じた時に、予断や先入観で判断することなく、多面的なものの見方ができるようになるためには、人は多様であると理解できる学習活動が必要である。

これらの4つの視点をふえまることで、ローカルな視点とグローバルな視点の往還を可能とする学習活動計画を組み立てることができると思う。そうした学習の積み重ねによって、多文化共生社会の実現に関わる課題や世界中の人々が協力して解決していかなければならない課題を「自分ごと」としてとらえ、自分の生活の中で、できることを見つけていこうとする態度が育まれるものとする。しかしながら、小学校段階の子どもにとって、「世界」はまだまだ遠く、実感としてとらえることができない。そのため、身の回りの生活とのつながりを可視化することが重要である。実際に体験できないことを理解できるようにするためには、世界で起きている問題がいかに、自分たちの生活と密接な関係にあるのかということを理解できるような学習展開であることが必要であるとする。

Ⅵ おわりに

今、学校現場に求められているのは、正解のない課題に対しても向き合える力を育むことだと考える。「多様性」の名のもと、様々な価値観があふれる社会の中で、何が正解なのかわからなくなっている人々が多いのではないだろうか。予断や先入観で判断することなく、視野を広げて物ごとを考えたり、他者の立場に立って考えたりする力が必要である。そうした力を身に付ける手立ての一つとして、グローバル・シティズンシップを育む学習活動があるものとする。地球規模の課題、地域社会における多文化共生への課題、どれをとっても解決の道筋は簡単ではない。さらに、すべての人が当事者であることを自覚しなければならない課題でもある。そうした課題に向き合っていくための知識理解、価値観の涵養は、社会全体で取り組まなければならないことではあるが、その中でも学校教育が果たす役割は大きいとする。

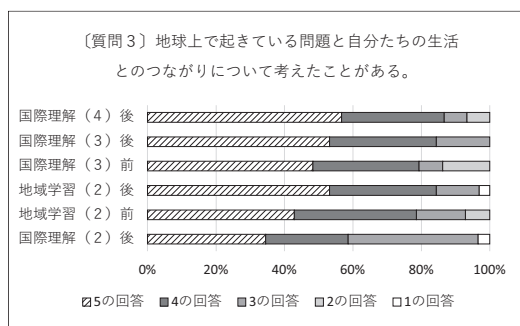
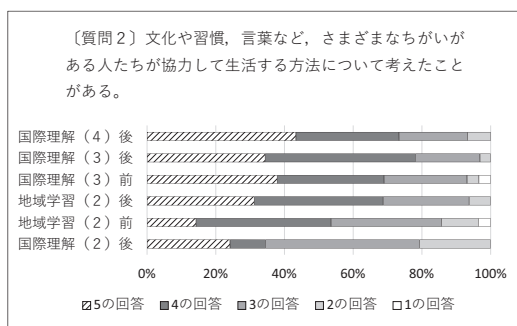
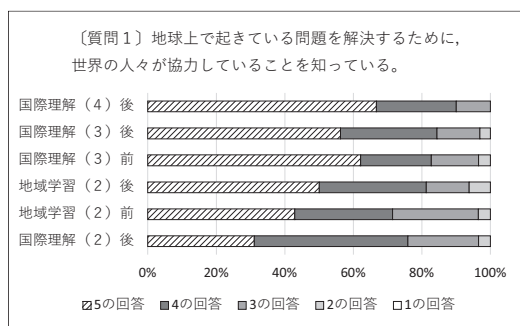
しかしながら、グローバル・シティズンシップを育む学習活動の多くは、教育課程内に位置づいていない。そのため、継続的な取り組みは難しく、単発の実践になることが多いという点は先述したところである。継続的・系統的な取り組みを維持させるためには、教育課程への位置づけは不可欠であるとする。教育課程に位置づけるためには、学習指導要領の示す教科等との関連が重要になってくる。しかしながら、日々の業務の中で、教材を精査し、その中にグローバル・シティズンシップにつながる視点を見つけ出し、学習活動を計画・実践していくためには膨大な時間と労力が必要となり、実践にまで結び付かない例は多いであろうことは想像に難くない。

また、グローバル・シティズンシップを育む学習活動に多様な側面があることも、現場で実践が広がらない原因となっているものとする。国際理解教育を例にあげれば、「国際理解教育は多様な実践を理論的に整理すること、多様な関連する教育の中から共通に見出せる実践の視点を明確化していくこと、個人的資質を国際的資質に結び付けるためのカリキュラムや学習論を明確にすることが課題になる⁹⁾」と佐藤が指摘するように、カリキュラムや学習論を明ら

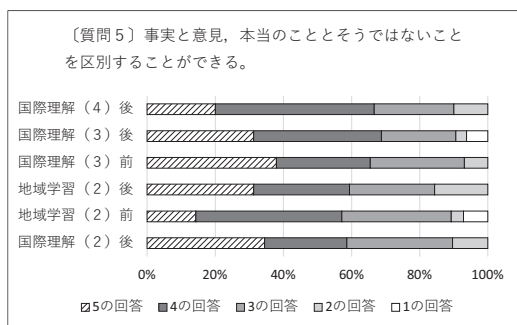
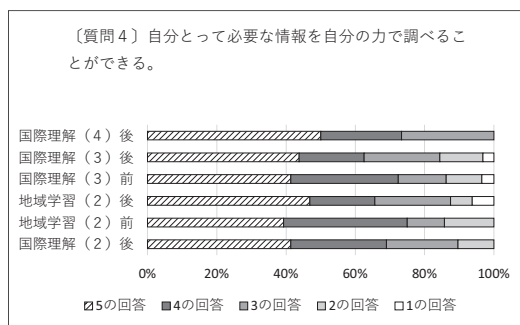
かにする必要がある。とりわけ、学習指導要領との関連は不可欠である。つまり、学習指導要領に示されている資質・能力に沿って、どのような知識や技能、価値観が必要とされているのかを明らかにする必要があるということだ。今後の課題としては、学習指導要領とグローバル・シティズンシップを育む学習活動の理論と実践をつなぐ学習目標の作成とともに、教育課程内に位置づける視点のさらなる明確化があげられる。これらの課題に対する研究を継続し、よりよいものを提示することで、グローバル・シティズンシップを育む学習活動の実践の裾野を広げていきたい。

表6 意識調査の結果(質問1～15)

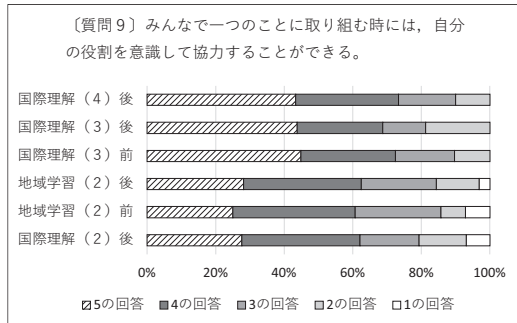
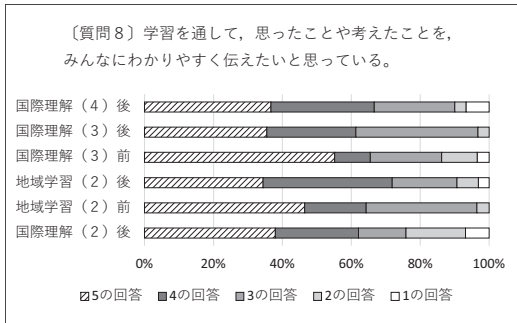
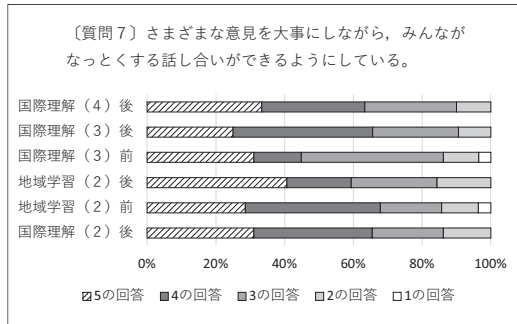
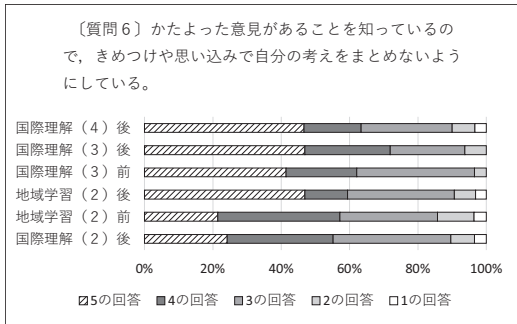
【知識・理解】



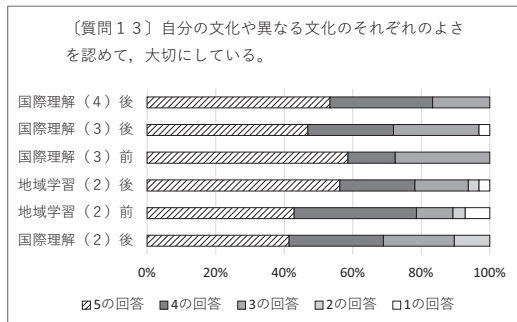
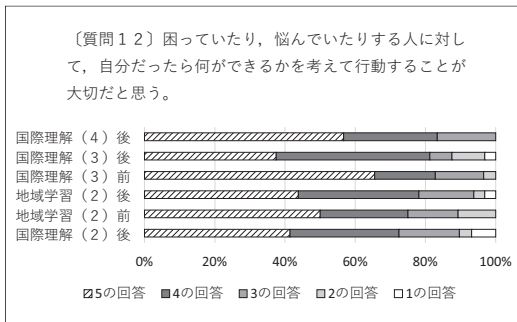
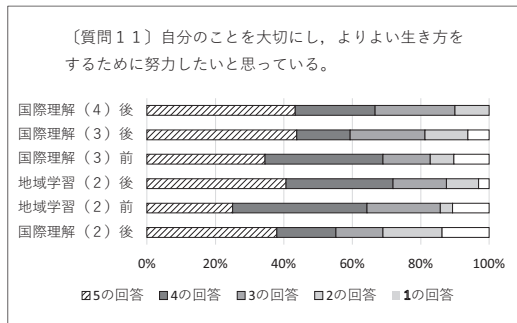
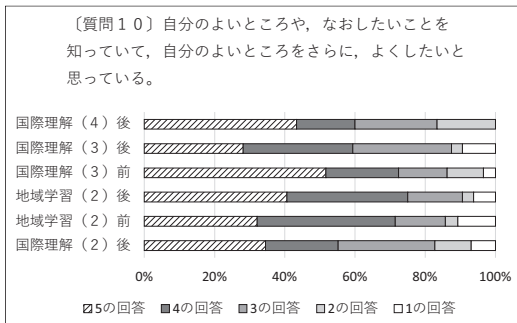
【技能・スキル】

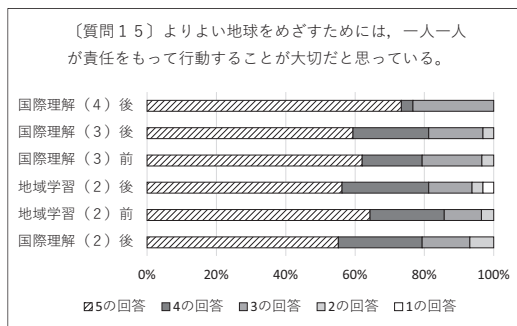
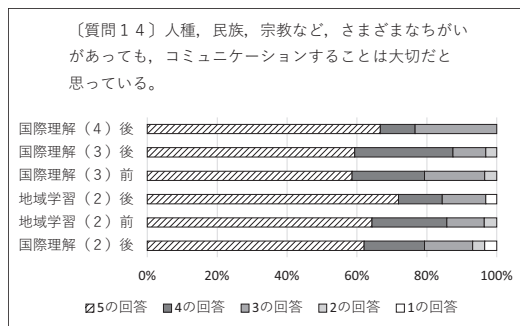


グローバル・シティズンシップを育む学習活動の成果と課題



【姿勢・態度・価値観】





引用文献

- 1) 文部科学省(2021)「持続可能な開発のための教育(ESD)推進の手引」(令和3年5月改訂版, 文部科学省国際統括官付き日本ユネスコ国内委員会)(令和3(2021)年10月16日最終閲覧)
https://www.mext.go.jp/content/20210528-mxt_koktou01-000015385_3.pdf
- 2) 文部科学省(2019)「「持続可能な開発のための教育:SDGsの達成に向けて(ESD for 2030)」について〜第74回国連総会における決議採択〜」(令和3(2021)年9月16日最終閲覧)
https://www.mext.go.jp/unesco/001/2019/1421939_00001.htm
- 3) 北村友人(2015)「グローバル・シティズンシップ教育をめぐる議論の潮流」異文化間教育学会『異文化間教育』42号, P. 11
- 4) 石森広美(2013)『グローバル教育の授業設計とアセスメント』学事出版, P. 281
- 5) 石森広美(2013)『グローバル教育の授業設計とアセスメント』学事出版, P. 128, 129に池田加筆
- 6) 同上, P. 128, 129をもとに池田作成
- 7) 奈須正裕(2019)「新しい学力観とSDGsカリキュラム」, 田中治彦・奈須正裕・藤原孝章編(2019)『SDGsカリキュラムの創造』学文社
- 8) 池田花笑子(2021)「Learning to foster global citizenship」2021 Asia-Pacific Regional Global Citizenship Education (GCED) Network Online Forum 補助資料
- 9) 佐藤郡衛(2007)「国際理解教育の現状と課題」日本教育学会『教育学研究』74(2), P. 82

参考資料

- 開発教育協会(2018)『パーム油のはなしー地球にやさしいって何だろう?ー』開発教育協会
- 山本敏晴(2005)『あなたのたいせつなものはなんですか?・・・カンボジアより』小学館
- 山崎亮(2012)『まちの幸福論ーコミュニティデザインから考えるー』NHK出版
- 「町の幸福論ーコミュニティデザインを考えるー」『6年国語教科用図書』東京書籍
- 広島平和記念資料館ホームページ(展示・催し物)(令和3(2021)年10月16日最終閲覧)
http://www.hpmmuseum.jp/modules/info/index.php?action=PageView&page_id=38
- ユニセフ協会「教えて!ユニセフ先生〜紛争と子ども編〜」(令和3(2021)年10月16日最終閲覧)
<https://www.youtube.com/watch?v=8IBIfK0YMm8&feature=youtu.be>
- ユニセフ協会「教えて!ユニセフ先生〜難民危機編〜」(令和3(2021)年10月16日最終閲覧)
<https://www.youtube.com/watch?v=Uuz2O59lWkQ&feature=youtu.be>
- 国連広報センター「『持続可能な開発サミット』オープニングスピーチ」(令和3(2021)年10月18日最終閲覧)
<https://www.youtube.com/watch?v=PiDNjF2AEbs>
- 国連広報センター「We the people: 持続可能な目標を伝えよう」(令和3(2021)年10月16日最終閲覧)
<https://www.youtube.com/watch?v=jV5f7YZJFQg>
- ユニセフ協会「ユニセフSDGs CLUB」(令和3(2021)年10月16日最終閲覧)
<https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/about/>
- Panasonic「SDGsって知ってる?」(令和3(2021)年10月16日最終閲覧)

<https://www.panasonic.com/jp/corporate/sustainability/citizenship/pks/sdgs.html>

Keywords : ESD(持続可能な開発のための教育), グローバル教育, 国際理解学習, 地域学習, カリキュラムマネジメント

ESD: Education for Sustainable Development, Global education, Learning for International understanding, Learning on communities, Curriculum management